

生物暦 Vol.4

～いきものこよみ～

国立環境研究所 生物季節観測研究チーム

1.ごあいさつ

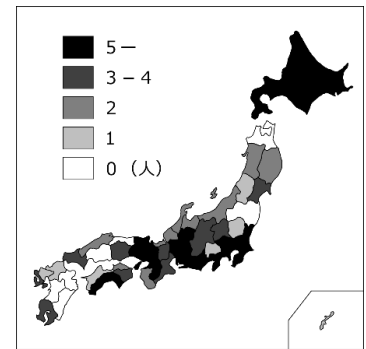
調査員の皆様、いつも観測にご協力いただきどうもありがとうございます。

このところ急に暑くなってきましたが、皆様お変わりありませんでしょうか。感染対策は引き続き大切ですが、暑さ対策も重視しないとイケませんね。マスクの使用も臨機応変に考えるのが良さそうです。これから本格的に暑くなってきますので皆様お体にはお気を付けください。ご無理は禁物です。

春の観測種目の観測記録の報告がひと段落してきたので、夏のセミが鳴き始める前にニュースレターを皆様にお送りしたいと思い執筆に至りました。今回は、この春がいかにか“アツい”春だったかという事を皆様と共有させていただきたいと思います(気温のことではありません)。

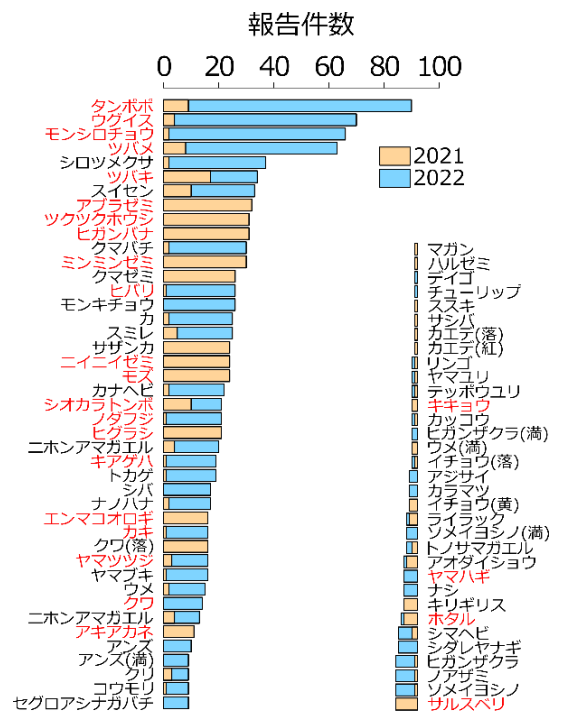
2.調査員募集の動向と現在ご参加の調査員の「分布」

まずは、おなじみの調査員マップです。現在、ご参加いただいている調査員の人数は 298 名です。全国 40 の都道府県からご参加いただいております。まだ空白地帯はありますが、全体的に色が濃くなってきたことにとっても嬉しく思います！引き続き呼びかけなど行っていきます。



3.ご報告いただいた観測記録の全報告件数

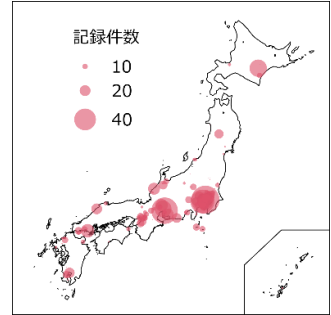
観測を開始した 2021 年 6 月から今までにご報告いただいた報告件数は、1221 件に上りました。その内訳が右の図です。オレンジ色が 2021 年の報告を、青色が 2022 年の報告を表しています。赤色の名前の生物は、重要種としてご提案させていただいている種目を表しています。このグラフから見てわかる通り、2022 年を示す青色の棒が、これまでいただいた報告(オレンジ色)をはるかに上回っていることが見て取れます。青いグラフの内訳をみると、ツバキ以外はほとんど春の報告です。調査員の皆様から頂く“春の報告祭り”を辻本一人が独り占めして楽しんでしまい申し訳ありません。今後は、何とかしてこの報告記録を、リアルタイムに調査員全員で共有できるようにしたいと思います。



4.これまでにご報告いただいた記録の分布と数

皆様から頂いた報告を集計して、日本地図上にプロットしたのが次の地図です。丸の大きさは記録数の多さを表しています。調査地点が近い報告同士は合計して図示しています。東京や名古屋などの大都市圏では、円が重なってしまっている場所もあります。大都市圏ではたくさんの調査員の方のご協力により、大きな円が描かれています。さらには、一人ですべての記録をご報告いただいている方々のご活躍によ

って、大都市圏以外でも大きな円が描かれている地域もあります。皆様の 1 件 1 件の報告の蓄積によって、このような大きな円を描くに至っていることがよくわかります。



5. アブラゼミの初鳴き予想

気象庁の記録を使用し、各都道府県の気象台における今年のアブラゼミの初鳴きが、いつ頃発生しそうかを予想した表が右の表になります。気象庁記

録の初鳴き日を積算気温(1月1日から初鳴き日までの間に、平均気温0度以上の日の温度を積算したものに)換算し、気象台ごとにその平均値を計算しました。そして、各気象台の今年の積算気温(将来の気温は予想値)を計算し、気象庁記録の積算気温を超える日を初鳴き予想日としています。予測では概ね7月上旬～中旬の場所が多そうです…が、この予測を計算している間に、計算された誤差は±2週間ぐらいの幅がありました。なので、早ければ6月中旬から、遅ければ7月下旬までの間に初鳴きが期待されます(そりゃそうだ…)。この予測精度を上げるためには、皆様の報告が重要なのです!! より精度の高い解析方法も探していきたいと思っております。

気象台	日付	気象台	日付	気象台	日付
札幌	2022/7/16	富山	2022/7/12	松江	2022/7/10
帯広	—	金沢	2022/7/8	岡山	2022/7/5
仙台	2022/7/14	福井	2022/7/11	広島	2022/7/5
青森	2022/7/22	甲府	2022/7/14	徳島	2022/7/11
盛岡	2022/7/19	長野	2022/7/13	高松	2022/7/17
秋田	2022/7/12	岐阜	2022/7/9	松山	2022/7/8
山形	2022/7/15	静岡	2022/7/16	高知	2022/7/8
福島	2022/7/18	名古屋	2022/7/4	福岡	2022/7/1
東京	2022/7/20	津	2022/7/9	長崎	2022/7/7
水戸	2022/7/16	大阪	2022/7/11	下関	2022/7/2
宇都宮	2022/7/13	神戸	2022/7/9	佐賀	2022/7/5
前橋	2022/7/22	彦根	2022/7/13	熊本	2022/7/4
熊谷	2022/7/12	京都	2022/7/11	大分	2022/7/8
銚子	2022/7/21	奈良	2022/7/2	宮崎	2022/7/5
横浜	2022/7/17	和歌山	2022/7/17	鹿児島	2022/7/9
新潟	2022/7/11	鳥取	2022/7/8	那覇	2022/6/1

5. フェノロジー研究豆知識

・生物季節観測の歴史

皆様にご参加いただいている生物季節観測の歴史についても振り返ってみましょう。

日本で最初に生物季節を観測する事について体系的に取りまとめられたのが 1880 年の気象観測法にはじまりました(それ以前には、古代中国の 24 気 72 候ごとの生物季節もあったようですが、体系的な観測といえるものではなかったため除いています)。これは、1872 年にスミソニアン博物館で発行された“スミソニアン叢書(Smithsonian Miscellaneous Collections)”の“気象観測の方向性と周期現象の記録方法(Directions for Meteorological Observations, and the Registry of Periodical Phenomena)”を訳したものであるとされています。その後 1887 年には気象観測法が正式に規定され、それが現在の生物季節観測法の礎となりました。この時には観測種目の指定はなく、大まかな分類群ごとに見るべきイベント(鳥類は巣作りや抱卵、植物は発芽や開花など)が提示されていたようです。1954 年に生物季節観測法が改訂され、生物季節観測指針(現マニュアルにつながる)が制定されました。これによって生物種目や、観測するイベントの種類などが明確に指定されました。その際には、日本全国で一律に観測する規定種 23 種目と地域特性などから各地の気象台が独自に選んだ選択種目 82 種目の観測を開始しました。その後、種目の見直しが行われ、2003 年には 47 種目が観測から除外されました。その後は、皆様ご存じの通り、2020 年の変更を経て現在に至ります。この、何とかつながった縁を絶やさぬよう我々も精いっぱい努力いたしますので、今後とも皆様のご協力をどうぞよろしくお願いいたします!

～・～・～・～・～・～活動へのご意見・お問い合わせの窓口～・～・～・～・～・～

E-mail: ccca_phenology@nies.go.jp Tel: 0298-50-2375 (辻本・西廣)